

優秀賞

私の誕生と両親の決意

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 二学年

吉田 博貴

私の両親は、友人の両親より年を取っている。私が幼い頃には感じなかったが、近頃少し気になるようになった。母に

「僕を何歳の時に産んだの？」

と、質問してみた。

「三十七歳で産んだのよ。初産だったけれどすごく楽で助かったわ。」

と、明るく答えてくれた。しかし、その後、

「あなたも大きくなったから、話しておきたいことがあるのよ。」

と言われ、少し不安になった。

私を産むのに、長い間不妊治療をしたこと。そして、双子のきょうだいがいたが、三カ月目くらいに消えてしまったことだった。私は、とても驚いた。ずっと「一人っ子」だと思っていたからだ。もし、きょうだいがいてくれたらと考えたら、複雑な気持ちになった。母は、とても悲しみ落ち込んだが、

「お母さんになるんだ。」

と、奮い立ったのだと話してくれた。私を産むために、こんな大変な経験をしてくれたことを知り、母の強さを感じた。

私は、中学生になり、将来の夢が変わった。医師になりたいと両親に話した。

「なりたいものになるためには、今の努力が大切だよ。」

と、父に言われた。そして、

「これを見なさい。」

と、差し出されたのは、ライフプランシートと書かれたものだった。私の誕生から始まり、小学校入学、卒業などの節目が書かれ、それに父母の年齢が入っていた。

「これを作った時はね、親になる覚悟をし、家族の未来を考えたんだよ。」

と、嬉しそうに話してくれた。産まれてすぐの時に、将来のことまで考えていてくれることに、感激した。よく見ると、父母の欄には、「死亡保険金」と書かれていて、驚いた。私の誕生を喜ぶのと同時に、自分たちの死を予想したものだっただからだ。

「守るべき家族が増えたからこそ、万が一に備える必要があるんだよ。」

と、父が言い、さらに母が

「私たちは、年を取っているから、あなたの成長とともに、自分たちの老後も

第54回中学生作文コンクール

考えなくてはいけないのよ。あなたに迷惑をかけられないからね。」と話し、目を細めている。

「産まれた時は、健康でさえいてくれたらと思ったけれど、医師になる夢を語ってくれるようになり、頼もしくなったね。お母さんたちも元気で頑張らなくちゃ。」そう言った母を小さく感じてしまった。もうずい分前に母の身長を超え、力も強くなった。私は、自分の力で未来の予想図に一つずつ目標を刻んでいかなくてはいけない。両親の期待と、産まれてこれなかったきょうだいの分も背負い頑張りたいと思った。両親の願いは、私の健やかな成長と目標達成だ。私も家族みんなが、“万が一”の備えを使うことなく、健康で過ごすことができるように願った。そして“今の努力”を惜しまないことを固く誓った。